

事例

大阪府・私立明星中学校・高校

エッセー作成を通して、多様な情報を整理し、
 自分の言葉でアウトプットする力を養う

長文を粘り強く読み通す力や、問題の意図を正確に読み取る力に課題を感じていた明星中学校・高校。教科の授業で多様な知識を学び、「総合的な学習の時間」ではそれらの知識を整理・統合して、生徒自身がテーマを決めてエッセーを書く活動を行っている。教科横断で総合的な読解力を育もうとしている同校の取り組みを紹介する。

感覚的に捉えずに、
 論理的に読み取る力が必要

大阪府・私立明星中学校・高校は、大阪府中心部に位置するカトリックの男子校だ。授業重視の教科指導、英語4技能の育成などにより、例年150人前後が国立大学に合格している。そのため、生徒の希望進路の実現に向けて、「大学入学共通テスト」で求められる思考力や読解力などの育成の強化は、大きな課題と捉えている。国語科主任の根来正彦先生は、次のように説明する。

「まず、長い文章を粘り強く読み通す力が弱くなっていると感じています。また、国語に限らず、文章題で

間違える生徒の多くは、問題の意図を正確に読み取れていません。何が問われているのかを論理的に解釈せず、感覚的に捉えているため、同じ間違いを繰り返してしまうのです」

一方、図やグラフなどの形で提示された複数の資料から必要な情報を読み取って答える問題に対しては、生徒はそれほど抵抗感を持っていないと、根来先生は語る。

「国語の授業でも、図やグラフなどから必要な情報を読み取って記述する問題には、長文読解に比べて意欲的に取り組んでいます。デジタルネイティブの生徒たちにとってそれらは親和性の高い素材であり、視覚的に捉えられるものでもあるので、

取り組みやすいのかもしれませんが」

ただ、そうした課題でも、問題の難易度が上がると対応できない生徒が出てくると、進路指導部部長の上畑卓治先生は指摘する。

		
大阪府・私立明星中学校・高校 教職歴29年。同校に赴任して29年目。教頭補佐。進路指導部部長。国語科。	大阪府・私立明星中学校・高校 教職歴32年。同校に赴任して32年目。国語科主任。	大阪府・私立明星中学校・高校 教職歴19年。同校に赴任して19年目。教務部。国語科。

「問題の意図を理解し、それに沿って図やグラフから必要な情報を読み取って答えを導くためには、思考力や判断力を含めた総合的な読解力が必要です。すなわち、複数の視点か

大阪府・私立明星中学校・高校

- ◎カトリック男子修道会「マリア会」により、創設。「地の塩、世の光」「よき明星紳士たれ！」を学園の標語として、カトリック精神にのこった全人教育を展開。
- ◎設立 1898（明治31）年
- ◎形態 全日制／普通科／男子
- ◎生徒数 1学年中学校約260人、高校約400人
- ◎2018年度入試合格実績（現浪計）
 国立大は、北海道大、東北大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに164人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ962人が合格。
- ◎URL <http://www.meisei.ed.jp/>

ら提示された資料の内容をきちんと読み取り、必要な情報を抜き出した後、共通点を見つけたりして、それらを問題の意図に沿って統合・考察する力が求められるでしょう。それは、『大学入学共通テスト』で求められる力であると同時に、職業を問わず、仕事をする上でも今後ますます求められる力だと思います。そのような資質・能力を育成する指導は、国語科だけではなく、教科横断で取り組むべき課題だと捉えています」

動画や音声の教材も用いて、読解力を多面的に育成

総合的な読解力を高めるために、同校が重視しているのがエッセー作成の指導だ。上畑先生は、読解力と記述力は不可分な関係にあると語る。

「読み取った内容を、本当に理解できているかどうかを本人が認識したり、第三者が評価したりするためにはアウトプット、つまり、書くことが必要になります」

そこで、2018年度の中学3年次から、「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）において教科横断でのエッセー作成の指導を始めた。前

期は国語科と理科、後期は国語科と社会科が連携し、各教科の授業で学習する内容と、総合学習におけるエッセー作成を連動させた。それらの指導は、高校で行う探究学習の事前学習としても位置づけている。

「多様な情報を整理・統合し、考察する読解力は、探究学習における課題設定を行う際にも必要な資質・能力です。そしてそれは、試行調査でも多様な資料を読み解き、答えを導き出す問題が中心となっていた『大学入学共通テスト』に対応するために必要なものだと考えています」（根来先生）

今回は、後期に行われた「人口問題」をテーマにしたエッセー作成の指導の流れを見ていく。

まず、社会科の授業において、環境・雇用・食糧などの分野を取り上げ、それらの視点から捉えた人口問題に関する様々な知識を学ばせた。それと並行して総合学習では、国語科が、段落構成や起承転結など、エッセーの書き方を指導し、短いエッセーの作成に何度も取り組ませた。その際、人口問題に関する動画を視聴させ、その内容の要約と疑問点、感想を書かせた。そのねらいは、文

章やグラフなどだけでなく、動画や音声といった素材からも情報を的確につかみ取り、整理する力を育成することにある。

「グローバル化が進む中、言語だけの情報のやり取りには限界があると思います。これからは、言語以外の表現に込められた意図を理解する力も必要になるでしょう。そうした力は、文章の内容を読み解く従来型の読解の指導だけで身につけるのは難しく、様々なメディアを駆使して、多面的に育成する必要があると考えています」（上畑先生）

ステップを踏みながら多様な情報を整理し解釈する

指導では、国語科と社会科で進捗状況や指導内容を共有し、エッセーのテーマを何にするか、どんなキーワードをインプットさせるのかといった目線合わせを随時行なった。

そのような指導を通して、人口問題やエッセーの書き方に関する様々な知識・技能を習得させた上で、学期末に人口問題に関するテーマを1つ決めて、その背景と対応策について1200～1600字のエッセー

を書かせた。その際、いきなりエッセーを書かせるのではなく、段階を踏んで完成に近づくようにした。

①人口問題に関するテーマ（論題）を思いつくままに箇条書きする。

②書き出したテーマの背景や問題の原因について書く。

③②で挙げたテーマの中から、自分が取り上げるテーマを1つ決め、その問題の解決策を書く。

④③の解決策の根拠と効果を書く。

⑤序論、本論、結論の段落構成で内容を考え、下書きをする。

⑥エッセーを書く。

それらの段階を踏むことで、社会科や総合学習の授業で学んだ多様な情報を的確に整理・統合し、それについて考察しながら、読解力を高めしていく。

相互評価の方法を工夫し、信頼性の高い評価手法を模索

エッセーの評価は、生徒同士の相互評価で行っている。評価項目は、句読点の位置や言葉の係り受けの正確さ、論旨の明確さ、段落構成などの5つ（図1）で、執筆者以外の5人の生徒が4段階で評価する。また、

評価にエッセー以外の情報が入らないよう、執筆者の名前は伏せ、無作為の5人に配布するようにした。

同校が行う相互評価の特徴は、採

点結果に関するアンケートも行い、その中で「あなたはこの採点結果を信用しますか」という項目を用意したことだ。評価者の名前は伏せられ

ているが、自分が書いたエッセーへの評価が的確かどうかを考えさせ、評価者を評価するのである。

「評価する側にも自分の評価に責任を持たせるために、この項目を設けました。また、他者を評価すること

で、自身のエッセーを客観的に読むメタ認知能力の向上にもつながると期待しています」(上畑先生)

現在、相互評価とアンケートの結果を分析し、教師1人が評価した場合と、複数の生徒で評価する場合とで、整合性はあるのか、どちらかに一貫性があるのかを調べている。東京工業大学の大学院生と共同でデータの解析を進めており、相互評価に一貫性が認められれば、エッセーの評価は生徒の相互評価を中心にする

ことも視野に入れている。「小論文や探究学習など、正解が1つではない問いに取り組む学びをどのように評価すればよいのかは、学校現場の大きな課題です。エッセーを書かせるのは簡単ですが、それを適切に評価し、生徒の資質・能力を着実に伸ばすためには、客観的で効果的な評価手法の確立が必要です。相互評価の信頼性の高さがデータで実証できれば、相互評価に対す

る生徒の納得感が高まり、取り組みに対する意欲も向上すると期待しています」(上畑先生)

出題者の意図を読み取るには コミュニケーション力の1つ

教科指導においても、総合的な読解力の育成を重視している。国語科の木村幸広先生は、出題の意図を読み取る力を身につけさせようと、教科書を題材にして、生徒自身に作問を行わせている。高校1年次の『羅生門』を例に流れを見ていく。

以前の授業では、場面や段落ごとに、書かれた内容について共通理解を図った上で、登場人物の心情など、さらに深い読解に進む流れにしていた。現在は、心情の読解に進む前に、グループワークによる作問を行う。

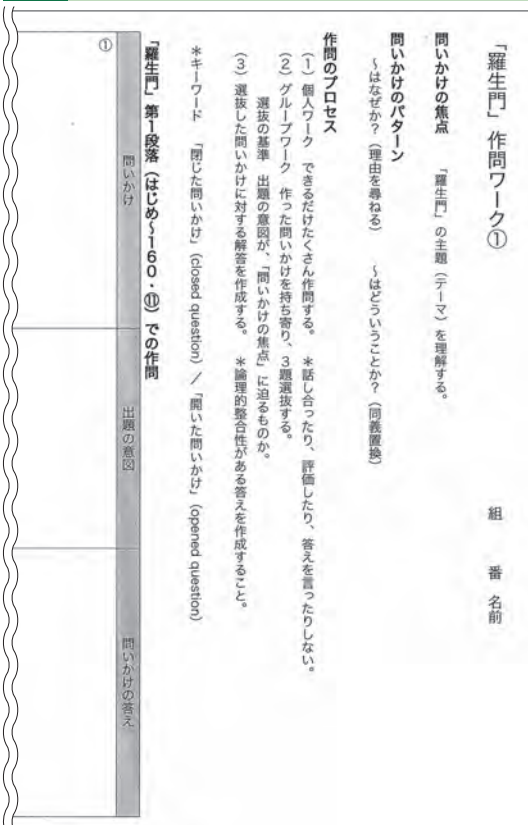
まず、一人ひとりができるだけの多くの問題を作り、それを3〜4人のグループになって持ち寄る。問題内容は、「はい・いいえ」で答えられるようなクローズド・クエスチョンでも、解答に幅を持たせることのできるオープン・クエスチョンのどちらでも構わない。グループで話し合っ

図1 「評価シート」と「ピア・アセスメントと採点結果に関するアンケート」



生徒同士の相互評価は、5項目で行う。それらはエッセーを書く際に注意すべき観点でもある。また、今後の相互評価の方法に生かそうと、相互評価をどう思うかについて聞くアンケートも行った。
 *学校資料をそのまま掲載。

図2 『羅生門』の作問ワークのプリント



*学校資料をそのまま掲載。

図と答えをワークシートに書き込む(図2)。そして、作った問題はグループ間で出し合い、各グループが解答・解説を行ってから、従来の心情の読解へと進む。

「グループ間で問題を出し合い、解答・解説を行う段階で、教師が伝えたい内容の大半が出てくるため、進度を速めることにもつながり、以降の授業がスムーズに進むようになりました。生徒も意欲的に取り組んでいて、主体的・対話的で深い学びという点でも、有効な方法だと思います」(木村先生)

評論の場合は、教科書の本文を読んで100〜200字の要約を作成

させた後、『羅生門』と同じ手順でグループワークによる作問を行う。大学入試で求められる出題者の意図を読み解く力は、日常生活におけるコミュニケーション力にも通じると、木村先生は考えている。

「相手が話した内容やその意図を理解すること、相手に分かるように伝えることは、コミュニケーションの基本ですが、生徒同士の問題は、大半がコミュニケーションがうまく取れていないことに起因します。入試問題を解くことは、出題者の意図を読み取り、それ的確に答えるという、出題者とのコミュニケーションでもあります。仲間と協力して作

問し、解答し合う活動を通して、社会で必要となる対人関係能力を高めてほしいと考えています」

教科・科目を超えたチームづくりがさらなる飛躍の鍵

一連の取り組みを通して、多様な情報を整理・統合し、自分の考えを論理的に表現する力、情報の発信者の意図を読み解く力は徐々に向上している。例えば、動画や音声視聴しながら素早く要点を書き、疑問点を出したり、考えをまとめたりできる生徒が増えたと言う。また、小論文の構成や様式を整えた上で、自分の言葉で書く生徒が増えてきた。

「生徒たちは総じて、解答に必要な要素を問題文の中から見つけ出し、それらを適切につなぎ合わせて解答を作り出す力が高いのですが、最難関の国公立大学の入試で結果を出すためには、そうした力に加えて、自らの考えや解釈を自分の言葉で論理的に表現する力が必要になります。エッセーを書く活動を通して、自分の言葉で論理的に表現することができると生徒が増えていることを心強く感じています」(上畑先生)

中学校の全学年で9月に実施している「中学総合学力調査」(*)でも、成果が表れている。18年度の中学3年生は、17年度の中学2年生の時と比べて、教科融合においてレベル3・4の生徒割合が6ポイント増えた。思考力の伸びがデータでも裏づけられた形だ。

今後の課題は、生徒の読解力や思考力を教科横断で伸ばす体制を、より強化していくことだ。

『「大学入学共通テスト」に対応できる資質・能力を育むためには、教科縦割りの指導では限界があるでしょう。読解力の育成を国語科だけの課題にとどめるのではなく、地理歴史・公民科や数学科、理科、英語科など、全教科・科目で連携した指導ができるかが、今後の飛躍の大きな鍵になるはずです」(上畑先生)

ここ数年、教科縦割りの指導に対する危機感が教師間で共有されつつあった。それを受けて、同校では、進路指導部・教務部・各教科主任からなるカリキュラム・マネジメント委員会を立ち上げた。今後、同委員会を中心に、教科横断の指導体制を強化し、さらなる相乗効果を高めていく考えだ。

* ベネッセのアセスメントの1つで、「教科の思考力・判断力・表現力」を測定し、段階別評価を行うテスト。国語・数学・英語に加え、合教科型のテストも含まれる。